



みどりの風

令和2年5月1日発行
校報 第574号
〔みどりの風 第117号〕
練馬区立関町北小学校

アヌスミラビリス ―驚異の年―

校長 大野 泰弘

4月の始業式と入学式の後、学校は臨時休校となり、その間に緊急事態宣言が発出され、これまでに経験したことのない日々を過ごすことになっています。子どもたちは、学び舎に通うことなく、4月さらに5月にかけて、外出もままならない中で、自宅で生活し続けています。そのストレスは個人差があるとは言え、大変なものであろうと推察できます。

表題の「アヌスミラビリス」とは、この休校期間中に読んだ新聞のコラムにあった言葉です。ラテン語で「驚異の年」を表します。これは、その記事によると、「1665年のペストが流行した時から翌1666年のロンドン大火に至る歴史的な災厄の続いた時代に書かれた詩人ドライデンの長編詩の題名」とのことで、ドライデンは、自らの避難先にて、英国の再生を称える詩を書いたのだそうです。

そして、「アヌスミラビリス」という言葉は、やがて、あのニュートンの偉大な業績を称える言葉になったと、その記事には書かれていました。具体的には、

「ニュートンはペスト禍で閉鎖された大学から故郷に戻り、存分に思索の時間を得た1年半の間に万有引力の発見などの3代業績を達成したのだ。悲惨な疫病を逃れる巣ごもりから生まれた『驚異の年』 人類の大きな前進である。」

ニュートンが過ごしたこの時期のことは「創造的休暇」とも呼ばれるのだそうですが、今日、新型コロナウイルスにより私たちに強いられている外出自粛、人との接触8割減に向けて、勇気づけられる逸話のように感じられます。

14世紀のペスト禍が、歴史的にルネッサンスにつながったように、今回の新型コロナウイルスによって、その終息後一気に毎日の生活様式や行動の変容につながることもあるかもしれません。将来、歴史的に振り返ったとき、新たな人類の叡智と新しい時代の幕開けであったと思われるような転換期になっているのでしょうか。ニュートンのように「創造的休暇」を耐え忍んだ子どもたちが、人類の未来に灯りを点す大きな発見や発明をしてくれることを期待したいですし、この「巣ごもり」の日々を通して、家庭内での対話が増え、親子の絆や家族同士の支え合い、家族愛が一層深まった、希望の光を見出すための忍耐力が高まった、新たな時代を生きるためのアイデアが生み出され、大きな歴史の転換点に出会えた、そんなことを笑顔で語り合えることができればよいと思います。そうなれば、「驚異の年」として、人類の歴史にあらためて刻まれることになるのかもしれません。

しかし、現状は、生命がけで日々お仕事をされている医療従事者、生活必需品を提供されている方々、感染者の受け入れをされている宿泊施設の皆様など、私たちの日常生活を支えてくださっている多くの業種の方々への感謝と敬意をもって、自分にできる最大限の努力を継続していきたいものです。

さて、本校では、臨時休校中のお子様の学習支援策として「靴箱ポスト作戦」を通して、学習課題のやり取りをしながら、引き続き、個々の子どもたちへの対応に努めてまいります。また、お子様の学習や生活面でのご質問やご相談に応じることができるよう、各学年宛でのメールによる相談窓口を設置したり、スクールカウンセラーや心のふれあい相談員による個別の面談を行ったり、これまで同様の対応をさせていただきます。「雲の向こう側には輝く太陽がある」と言われますが、今日の状況にしっかり耐えながら、来たるべき学校再開に向けて諸準備を整え、そして、子どもたちを温かい心と笑顔で迎えたいと考えております。

今、街中では、ハナミズキの白やピンクの花が美しく咲き、街の景色に彩を添えています。このハナミズキはその昔日本からワシントンに贈られた桜の返礼として、アメリカ合衆国から届けられたのだそうです。両国とも、新型コロナウイルスによる感染拡大の防止に尽力していますが、その花言葉は「逆境に耐える愛」とのこと。このハナミズキを見ながら、逆境に打ち勝つ愛と勇気、そして忍耐をもってこの難局を乗り切っていきたいものです。

引き続き、今月中の臨時休校の措置が継続されることになりましたが、子どもたち、保護者、地域の皆様方の健康を願いつつ、やがて学校が再開された後には、皆様のご理解、ご支援、ご協力を賜りますよう、お願い申し上げます。